

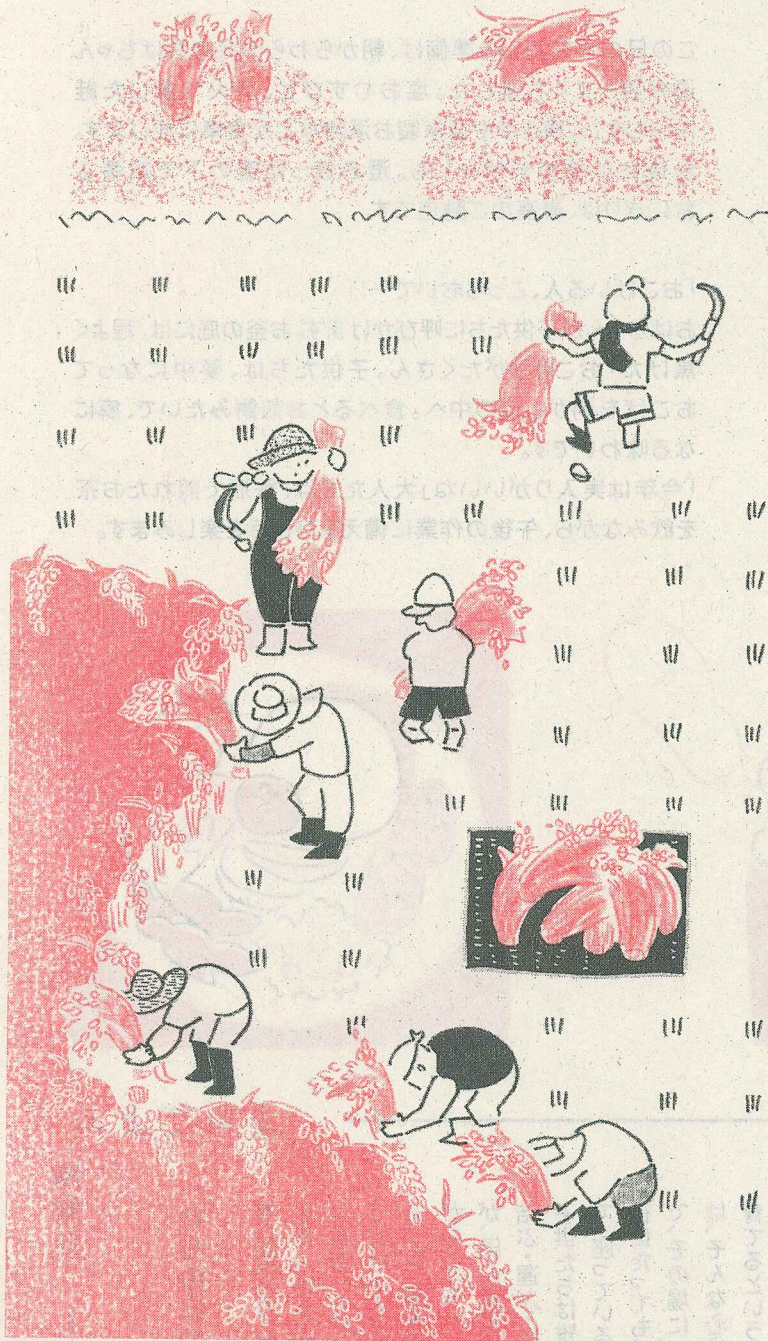
稲刈り

— 大人も子供も。季節の恵みを一緒に味わい愛でる一日 —

田んぼの学校

北本市高尾地区、高尾橋のたもとで活動している市民団体『荒川わらの会』。毎年子供たちを大勢集めて『田んぼの学校』という、体験企画を開催しています。田んぼの学校では、お米を植えて食べられるまで、その工程を半年間にわたり、参加者が一緒に体験していきます。

わらの会では、コシヒカリなどに加え、黒い色をした「古代米」など、数種類のお米をつくっています。2021年の「田んぼの学校」では、田植えは6月に行い、稲刈りは10月3日に開催されました。この間に、田んぼの水管理や草取りを経て、稲は穂を実らし、順調に成長してきました。秋晴れの空の下、大人子ども総勢20名以上が集まって、にぎやかに稲刈りが始まりました。



稲を刈る

首を垂れる黄金色の稲穂。手で稲の株元を握り、勢よくカマを挽きます。「ザクッザクッ」小気味よい音を立てて、稲刈りは進みます。「間違って自分の足を切らないでね」わらの会のおじちゃんが、時々声を掛けてくれます。刈り取った稲を畦まで運ぶと、次の人にバトンタッチ。膝の上を上手に使って、稲を直径15cmほどの束にし、紐で結んでいきます。稲の束がたくさん出来上がると、今度は天日干しの作業へ。竹で作った「稲架(はさ)」という台に、稲の束を掛けていきます。この作業をわらの会では「はさかけ」と読んでいます。稲の束は、担がれたり一輪車に乗せられて、続々と稲架へ。低い場所には、子供たちも一緒に稲を掛けていきます。お米はこのまま、約2週間にわたりじっくりと乾燥させます。

